



温暖化 特産品が変わる!?

東京で亜熱帯の果実を育て、リンゴ王国・青森でモモを栽培する。意外な組み合わせが各地で誕生している。地球温暖化による気温上昇がもたらした現象は、「恩恵」にも見えるが、そう単純ではなさそうだ。

東京・亜熱帯果実

「東京で南国気分を味わえる」。東京都八王子市に、そんな文句で売り出し中の農産物がある。南米の亜熱帯地域原産のパッションフルーツだ。

主に鹿児島県や小笠原諸島で栽培されていたこの果実の栽培が、同市で本格的に始まったのは2013年頃のこと。若手農家が緑化に使用として育てたところ、期せずして立派な実が育つことがわかり、商品としての生産が広がったという。

これだけを見れば、温暖化は悪くないことのようにも思える。だが、危機感が抱かれているのは、人類史上経験のない速度での気温上昇をもたらすと考えられるからだ。

(2022年3月12日 読売新聞朝刊より)

青森はリンゴからモモへ

各地では気候変動に適応するため、栽培品目の転換が進んでいる。

その一つが、青森県・津軽でのモモの栽培だ。津軽のリンゴ栽培の歴史は明治初期まで遡り、国内市場の占有率は6割近い。しかし、近年は夏場の暑さで、やけどのような痕ができる「日焼け」などの被害が目立

つようになってきている。

そこで次世代の品目としてモモに着目した。モモの栽培は、津軽で04年頃から十数軒の農家で始まり、現在は60軒ほどに広がった。モモ栽培を指導するJA津軽みらいでは「伝統を大切にしたい気持ちもあるが、農家の将来も守らなくては」とする。「津軽のモモ」は、岐路に立つ日本の農業の象徴でもある。

品種改良も重要

もう一つ重要なのが品種改良だ。品種改良で気候への対応を進めてきた作物は多く、その代表が米だ。

稲作は古くから九州から東北で広く行われ、明治期には北海道でも広がった。しかし当時の品種は寒さに弱く、品種改良で生まれたのが「ひとめぼれ」「ななつぼし」だ。これにより東北、北

海道は有数の米所となり、両地域で全国シェアの35%を占めている。

現在は逆の状況だ。夏の暑さが厳しくても安定した収穫が見込める「きぬむすめ」「にこまる」に関心が集める。福岡県の「元気づくし」、佐賀県の「さがびより」など自治体が開発した品種もある。暑さに強いイチゴ「夏の輝」、猛暑下でも栽培しやすいレタス「タフV」なども注目されている。

1 農業が気候変動に適応していくために必要なことを2つ記事中から抜き出しましょう。

2 下の文章は、元の記事にあった一部分です。内容から判断し、A、Bに入る言葉を選びましょう。

農業への影響は大きい。専門機関の推計によると2060年代には、東北地方で栽培が盛んなリンゴは (A) が最適地になる。愛媛県や和歌山県の特産・温州ミカン、適地が (B) し、今の産地では栽培が困難になるだろう。

- A: ① 九州地方 ② 近畿地方
③ 関東地方 ④ 北海道地方
B: ① 東進 ② 西進
③ 南下 ④ 北上

3 次の農作物や品種は、記事中でどのようなこと具体例として例示されているのですか。適切なものをそれぞれ選びましょう。

- ・津軽のモモ ()
- ・ななつぼし ()
- ・パッションフルーツ ()

- ① 気温上昇がもたらした恩恵
- ② 気温上昇に対応したことへの後悔
- ③ 気温上昇にもたらした弊害
- ④ 急激な温暖化への打開策
- ⑤ 稲作が古くから行われてきた証拠
- ⑥ 寒さに対応するための努力の結果



温暖化 特産品が変わる!?

東京で亜熱帯の果実を育て、リンゴ王国・青森でモモを栽培する。意外な組み合わせが各地で誕生している。地球温暖化による気温上昇がもたらした現象は、「恩恵」にも見えるが、そう単純ではなさそうだ。

東京・亜熱帯果実

「東京で南国気分を味わえる」。東京都八王子市に、そんな文句で売り出し中の農産物がある。南米の亜熱帯地域原産のパッションフルーツだ。

主に鹿児島県や小笠原諸島で栽培されていたこの果実の栽培が、同市で本格的に始まったのは2013年頃のこと。若手農家が緑化に使おうとして育てたところ、期せずして立派な実が育つことがわかり、商品としての生産が広がったという。

これだけを見れば、温暖化は悪くないことのようにも思える。だが、危機感が抱かれているのは、人類史上経験のない速度での気温上昇をもたらすと考えられるからだ。

青森はリンゴからモモへ

各地では気候変動に適応するため、栽培品目の転換が進んでいる。

その一つが、青森県・津軽でのモモの栽培だ。津軽のリンゴ栽培の歴史は明治初期まで遡り、国内市場の占有率は6割近い。しかし、近年は夏場の暑さで、やけどのような痕ができる「日焼け」などの被害が目立

つようになってきている。

そこで次世代の品目としてモモに着目した。モモの栽培は、津軽で04年頃から十数軒の農家で始まり、現在は60軒ほどに広がった。モモ栽培を指導する「A津軽みらいでは「伝統を大切にしたい気持ちもあるが、農家の将来も守らなくては」とする。「津軽のモモ」は、岐路に立つ日本の農業の家徴でもある。

品種改良も重要

もう一つ重要なのが品種改良だ。品種改良で気候への対応を進めてきた作物は多く、その代表が米だ。

稲作は古くから九州から東北で広く行われ、明治期には北海道でも広がった。しかし当時の品種は寒さに弱く、品種改良で生まれたのが「ひとめぼれ」「ななつぼし」だ。これにより東北、北

海道は有数の米所となり、両地域で全国シェアの35%を占めている。

現在は逆の状況だ。夏の暑さが厳しくても安定した収穫が見込める「きぬむすめ」「にこまる」に関心が集める。福岡県の「元気つくし」、佐賀県の「さがびより」など自治体が開発した品種もある。暑さに強いイチゴ「夏の輝」、猛暑下でも栽培しやすいレタス「タフV」なども注目されている。

1 農業が気候変動に適応していくために必要なことを2つ記事中から抜き出しましょう。

栽培品目の転換

品種改良

2つ目が見つからなかった人はいませんか。記事の後半に、「もう一つ重要なのが」とあるのがヒントです。

温暖化で気温が上がるため、栽培に適した温度の場所は、現在より北へと移ってきます。Aは、東北地方よりも「北」と考えると④の北海道しかありません。

2 下の文章は、元の記事にあった一部分です。内容から判断し、A、Bに入る言葉を選びましょう。

農業への影響は大きい。専門機関の推計によると2060年代には、東北地方で栽培が盛んなリンゴは (A ④) が最適地になる。愛媛県や和歌山県の特産・温州ミカンは、適地が (B ④) し、今の産地では栽培が困難になるだろう。

- A: ① 九州地方 ② 近畿地方
 ③ 関東地方 ④ 北海道地方
- B: ① 東進 ② 西進
 ③ 南下 ④ 北上

津軽のモモは、温暖化に対応して、一定の成果を上げた事例です。ななつぼしは、品種改良で生まれた「寒さに強い稲」ですね。パッションフルーツは、南国のフルーツが収穫できた「うれしい」例として紹介されています。

3 次の農作物や品種は、記事中でどのようなこと具体例として例示されているのですか。適切なものをそれぞれ選びましょう。

- ・津軽のモモ (④)
- ・ななつぼし (⑥)
- ・パッションフルーツ (①)

- ① 気温上昇がもたらした恩恵
- ② 気温上昇に対応したことへの後悔
- ③ 気温上昇にもたらした弊害
- ④ 急激な温暖化への打開策
- ⑤ 稲作が古くから行われてきた証拠
- ⑥ 寒さに対応するための努力の結果



読んでみよう！

◆ミー太郎のおすすめ記事

北海道でサツマイモ

ジャガイモ主産地の北海道をサツマイモの生産地に育てる取り組みが進んでいる。近年の気温上昇で、有望な産地となる可能性が出てきたからだ。「焼き芋ブーム」の東南アジア向け輸出などで需要が高まる一方、九州などの主産地は病害に見舞われており、安定供給の実現に向け、官民が北の大地に注目している。

安定生産へ国が支援

先月6日、北海道・羊蹄山麓の真狩村。農業法人「ベジタブルワークス」の農地に、青果卸会社や種苗会社の関係者が集まった。土の中から掘り出したのは鮮やかな紫色のサツマイモ。6月に約50㍏作付けし、15㍏を収穫した。同法人の佐々木伸社長(42)は「初めて作ったが、栽培しやすい。道内でも普及するはず」と太鼓判を押した。

気温上昇 よく育つ ■ 病害 主産地ピンチ

農水省によると、2020年の国産サツマイモの輸出額は20億6200万円に上り、10年間で10倍超に増えている。しかし、国内の関係者には、需要増を手放しで喜べない事情がある。ひとつは、カビが原因で茎などが育たなくなる「基腐病」だ。18年以降、主産地の九州南部を中心に確認されており、品種によっては収穫量が落ちた。需要増の波に乗るには、安定的な供給が不可欠で、いかに産地を分散・拡大させるかがカギとなる。そこで注目されたのが、サツマイモの生産実績がほぼゼロだった北海道だ。近年は夏に30度を超す日数が増えるなど気温が上昇。雪や霜の時期も遅くなるなど、サツマイモを栽培しやすい環境になっているという。

(2021年11月9日、読売新聞朝刊より)

北海道でも30度を超える日が増え、サツマイモが栽培できるのなら、

他の農作物の産地もどんどん変わっていきそうですね。

